

# 研究所へのお便り

中原裕幸  
(社) 海洋産業研究会

## 阿嘉島臨海研究所を訪ねて

### サンゴ礁のサンクチュアリーに!!

東京水産大学の森博士から、是非見に来て下さいよ、とかねてから言われていた阿嘉島臨海研究所を訪ねる機会が得られたのは、海上保安庁水路部の仕事で那覇市での当会主催の会議後の日程が何とかとれたからである。この研究所の件は、実は森博士とは別に、来訪経験のある獅山有邦氏(当時: 科学技術庁海洋開発課)からも強くすすめられているのである。

到着後、旧知の保坂理事長自らによるいろいろの説明を聞いた後、早速、周辺の中視察となった。初日はスノーケリング、二日目はスクーバダイビングとなったが、そのサンゴ礁の美しさは目を見張るばかりだ。これはこの海を見る者すべてが実感するに違いない。余り上手でないスクーバダイビングでは、足元のサンゴをフィンで傷つけたら申し訳ないという感が強かったが、そうした意識とは裏腹に体はいうことをきいてくれずジタバタとしてしまい、同行した当会の青木薫研究員にたしなめられてしまう始末であった。

それにしても、このサンゴ礁の素晴らしさは何としたことだろうか? TV で映像として映し出されるサンゴ礁のイメージは、実は実際の海中では滅多にお目にかかれない貴重な代物であることは、数少ないダイビング経験しか持たない私でも充分承知しているのだが、阿嘉島にはそれがある。解説つきで案内してくれた保坂理事長の話の中に、「ここをサンゴ礁のサンクチュアリーに何故しないのか?」との指摘を来訪研究者の方からよく受けるのですよ、と伺ったことを今でも鮮明に記憶している。海に関する、あるいは沿岸域管理に関する法制度を少しばかりかじっている私としては、何とかそうできないものかと頭をめぐらせるのだが……。たとえば、地方自治体による条例制定による方法や、しかるべき団体にそうした運動を推進してもらいたい気がする。私の立場からすれば、応援団の役割を果たすのがその役回りと考える。

### 地道にじっくり育てほしい AMSL!!

それにしてもこの研究所はユニークだ。国公立機関でなく、大学付属でもない。私設の研究所は、本誌 1 号の元田茂北海道大名譽教授によれば戦前に二つしかなく、今日では稀有の例であろう。そして同じ本誌 1 号に記載されている W. M. Hamner 博士 (UCLA) の言にあるように、この種の私立の海洋研究施設が短命に終わりがちであり、そうならないような手立てを講じるべきだ、との指摘に私は全面的な賛意を表したい。

そのためにも、私は、本誌「みどりいし」の冒頭もしくは末尾に、毎号必ず本研究所の設立趣旨や目的を簡潔に掲げてはどうかと考える。何故ならば、短い滞在期間中に伺った理事長

をはじめ林原氏以下の研究員や職員の方々の話を総合すると、本研究所の独自性が充分理解されるためには、地道な繰り返しである広報が必要だと思うからである。大々的な PR である必要はもとより全くない。外部の人間としてはじっくりじっくり育ってもらいたいと思う。

本研究所は、私の理解では次のように概括できる。第一は、本研究所が自前の研究を実施する場であると同時に外来の意欲ある研究者にその場を提供するという、二重の異なった役割を有している点である。第二は、自前の研究として、眼前のサンゴ礁の研究のメッカの一つたりうるポテンシャルを有していることである。この点は、森博士も本誌 (1 号) に一文を草した中に、北半球の本研究所と南半球のグレートバリアリーフでの連携による研究の倍増可能性を述べている。地球的規模環境問題が重視される 90 年代において、その意義は誠に大きい。第三は、場の提供という役割が極めてユニークであることだ。有効に機能させるのに苦労が伴いながら、その成功の積み重ねが実現すれば他に類例の全くない、日本で唯一の特色をもった研究所になり得るであろう。この第三の点に私は特に感銘を受けた。まだスタートして数年の本研究所は、この点で実績の芽が少しは出てきたかな、という時期ではないだろうが、今後は大いに頑張ってもらいたい。

このような本研究所の独自性の一端は、他の諸点によっても、もっと深められるであろう。しかし、本研究所自らが、他の研究所の水準と内容をよく理解し、自らの独自性をキチンと認識していかなければせっかくの独自性も薄れてしまう。広く世界に眼を開いて自己の立場と位置、役割を認識してもらいたい。と同時に、利用研究者を中心に、その存在を外部関係方面にも認識させていく努力が必要に思われる。要するに、支持者、支援者、応援団の形成である。私の役回りと前述したとおり、同行した青木と子どもも是非応援団の一員に加わりたいと思う。

小規模でよい。数人づつの利用研究者を大切に、ワークショップ的なものでも十数人程度の規模でよい。何百人のイベントよりはこうした地道な積み重ねこそが力となる。世界の海洋に関する知性に、本研究所の存在を認識してもらい、常にそうした人々に扉を開けておくことを願いたい。

少々ぜいたくすぎる料理も素晴らしかったし、世界レベルの施設も、それが世界レベルであることが分かる人々を受け入れてはじめて真価を発揮する。他方、地元に着した仕事も実は大事な点である。地元に見放されては元も子もない。その点、保坂理事長も抜かりはないと思う。

たまたま、二日目のダイビング視察に行く船上から、海面上を漂うサンゴ産卵の帯を生まれて初めて見た感動をいつまでも胸にしまっておきたい。